

I これからの霊長類学

1967年6月1日に開所した私たちの研究所は、まもなく30年になろうとしている。この30年の前半は、それまであまり交流のなかった多くの分野からそれぞれのエキスパートが寄り集まり、新しい霊長類学という学問分野を作ってきた過程だったとも言えるだろう。研究を進める方法論や技術はもとより、組織の運営から学問に対する思想に近い部分まで少しずつ異なる人たちの間では、齟齬や衝突まであったと記憶している。しかし、お互いに異なる存在を理解し合い、霊長類研究所の運営が確立されてきた。

その上に立って後半には、いくつもの新しい共同研究が生み出されてきたことは言うまでもない。実験研究者が東南アジアやアフリカのフィールドワークに参加して野外実験を試みたり、フィールドワーカーが飼育群の研究や資料の実験的分析を自分でこなすようになったのは、表面に現れた顕著な部分にすぎない。新しく参加してきた若者たちは、当然のことと認識するようになってきた。

ほぼ時を同じくしてアメリカに設立された7つの地域霊長類研究センターを初め、現在では世界中に多くの霊長類研究センターがあるが、そのほとんどすべてが広義の医学研究を柱としている。アメリカの霊長類センターの設立は宇宙科学推進の一貫でもあった。私たちの研究所のように、「ヒトに至る道の解明」を柱にして全方向的な霊長類学を目指しているセンターを、私は他に知らない。先輩たちの作ってきたこの方向性は正しかったと思う。そして、これからも堅持すべき柱だと思っている。

しかしながら、一つの研究所ができ、新鮮な意気に燃えて突き進めるのは25年から30年までだと言われたことがある。たしかに、設立時の寄り合い所帯から一つの目標に結集し、その上で多くの成果を上げてきた。霊長類学を専攻した大学院生が多教育ち、学界の中核を担うまでになってきた。私たちの作ってきた分野も、「サル学」と呼ばれて世間に認知されるようになった。そんな中で、これからの霊長類学をどのように進めて行くのか。今、霊長研は新しい正念場に立っているように思う。激しい競争の中でライバルより半歩先に進もうとする毎日の研究生活ではあるが、ときどきは歩をゆるめて、大きな目標と枠組みを見直した方がよいだろう。今年度中にまとまるはずの自己点検評価報告も、このような目的に積極的に利用してゆきたいものだと思う。

突き進む学問的課題とは別に、私たちの前には二つの問題が立ちはだかっている。一つは動物福祉である。私たち自身が明らかにしてきたことだが、これまで考えられていた以上にサル類が人に近い存在だと分かったからこそ、いっそう、研究対象を大事にしなければならない。人としての研究者の心が問われていると言うべきだろう。動物実験絶対反対を叫ぶ愛護論者を内包する社会に対しても、私たちが研究対象とどう向き合い、何を明らかにしつつあるかを明確に示してゆかねばならないだろう。檻を破り施設を破壊する不埒な輩に対する物理的防衛体制を固める作業は二の次でなければならない。

もう一つは霊長類とその生息地の保護・保存である。開発と呼ばれる自然環境の破壊は、今、世界の隅々にまでおよんでいる。そして多くの霊長類がその住処を失い、絶滅の瀬戸際に立たされている。工業国化の進む東南アジアはもとより、人口密度の低いアフリカの国境地帯でさえ例外ではない。日本では、追いつめられた野生のサルたちが農山村の人々と摩擦を引き起こしている。物質的な豊かさを求める人々がサルを含む自然環境と共存して行ける道を切り開かなければならないだろう。

「人とは何か」を明らかにしようとする最先端の研究をさらに発展させるためには、これらの問題をも学問の中に取り込んで行かなければならない事態になっている。それなしに、霊長類学の未来はないものと私は思っている。

所長 杉山幸丸